

僕の要石

福島県

富岡町少年剣道団

中学3年 小林士道

僕は、剣道が大好きだ。そして、富岡町少年剣道団が大好きだ。今年、富岡町少年剣道団での最高であり最終の学年を迎えた。集大成となるべき年を思い描いていた。しかし、昨年より新型コロナウイルス感染拡大防止のため、市の施設を借用している稽古は、幾度となく長期間できなくなった。同じように県内外の試合が次々に中止となっていった。剣道が好きな理由の一つでもある「出逢い」もなくなってしまった。小さい頃からいろいろなところへ遠征していたおかげで、たくさんの人との出逢いに恵まれた。そんな各地の剣道仲間にも全く会えない現状は寂しくて仕方がない。もう一つ好きなところは、思う存分体を動かして、大きな発声で気合いを込めて行う稽古だ。何とも言えず気持ちが良い。しかしそれも、ルールが変わったことで、マスクをしての稽古や試合であったり、大きな声を出すことが禁止になったり、きゅう屈さを感じずにはいられない。また、試合では、実質つばぜり合いがなくなり、引き技が得意だった僕は、試合の組み立ても考え直さなければならなかった。

そんなコロナ禍で制限がたくさんあり、なんだか楽しくないと思っていたときに、指導者でもある父が、「富剣について勉強してみるか。」

と声をかけてくれた。「聞きたい」と思った僕は、二つ返事をお願いした。富剣の設立から富剣の四つの目的、富剣を支える母集団や唱和している言葉の意味、先輩達の実績や震災前の稽古のことをいつもより詳しく話してくれた。実績については、想像していた以上に素晴らしいもので、改めてすごい道場で剣道を教えてもらっているんだと幸せを感じた。稽古では、館長先生が徳の教育に力を入れており、配られた数々のプリントを話しながら見せてくれた。そんな徳の教育は、二時間の稽古のうちの一時間を超えることがたくさんあったと聞いて驚いた。父は僕達に館長先生の百分の一しか伝えられていないと反省していた。技能を高めるだけが強さにつながるわけではないということがよく分かった。最後に団旗の話になった。昔は赤地に白で「気剣体」の文字が書かれた団旗だったという。今の団旗は、紺地に赤で「狂事徳成」と書かれている。これは館長先生が長年かけてたどり着いた造語で、「ことを成し遂げるには常識的な見方、考え方をしていたのでは達成困難であり、周囲の意見に惑わされず、狂ったように事に当たることが大切で、その実践行動こそが徳を成す結果を生むのである。」という意味だ。僕はこの言葉が大好きだ。考え方が素直にかっこいいと思う。話を聞き、知れば知るほど富剣が好きになる。感慨深くいる僕に父は、

「コロナ禍で今まで通りの剣道ができなくてつまらない気持ちはよくわかるけど、竹刀を振るなどか、運動するなって言われているわけではないからできることはあるぞ。再開したときに向けて、準備しておくことが大切だぞ。」

と言った。僕の心を見透かされている。父にはかなわない。そうだ。やれることもやらずに腐っていても仕方がない。そう思い、素振り、筋トレ、走り込みの三つは続けていこうと決めた。怠けそうになる度に父が声をかけてくれたおかげで続けることができ、以前より早く、しっかりとした打ちができるようになったと実感できた。

今年度で僕は富剣を卒団する。富剣として試合で集大成をぶつけることは叶わなかったが、十年間、心も体も技も磨くことができた。今できることを考えて実行する大切さを知ることもできた。これからも富剣の精神を要石として剣道を続け、将来、大好きな富岡町少年剣道団に貢献できる人になりたいと思っている。